特116
702

志賀
鷺
大原御幸
梅枝
楚郭古
七

始

特116
702

帝國圖書館藏

大正
10.9.24
内交

志賀　概説　内七巻ノ一

一臣下、霞立つ春の頃、近江國志賀の山に到りて花をながめゐたる處に、老若二人の山賤、薪に花の枝を折り添へたるを負ひて来り、花の蔭に憩へるにぞ、不審に思ひ尋ぬれば、道のべのたよりの櫻折り添へて薪や重き春の山人といへる大伴黒主の歌を引き、花の蔭に憩へるは賤しき身におほけなけれど彼の歌人を思ひ出でてのことなれば許したまへとて、延喜の聖代に歌道の興れるを説き、遂に其身の大伴黒主の化現なることをほのめかして立去りしが、程も無く黒主の靈山神となりて現れ、舞ひ奏でて興じけり。

此曲總ジテ位閑カニ居着カヌ様ニ謡フベシ

役別		装束附
ワキ	大臣	大臣烏帽子　赤上頭掛　着附厚板　袷狩衣　白大口　紋付腰帯　扇
ワキツレ	從者二人	大臣烏帽子　萌黄上頭掛　着附厚板　赤袷狩衣　白大口　紋付腰帯　扇
ツレ	男	着附無地熨斗目　浅黄縷水衣　紋付腰帯　男扇　負柴ニ櫻かざし
前シテ	樵夫翁	面朝倉尉(笑尉モ)　尉髪　着附小格子　茶絓水衣　緞子腰帯　尉扇指ス　負柴ニ櫻かざし　杖突ク
後シテ	大伴ノ黒主	面邯鄲男　透冠　黒垂　色鉢巻　着附紅白紋厚板　袷狩衣　白大口　紋付腰帯　神扇

季	三月	曲柄	脇能 (初番目)(神祇物)
所	近江國滋賀郡滋賀黒主祠	稽古順	二級

志賀

世阿彌元清作

ワキ大臣　ワキツレ二人　次第上　ツヨク　拍子ニ合

道ある御代の花見月。道ある御代の花見月。都の山ぞ長閑けき。

そもそもこれは當今に仕へなる臣下なり。さても江州志賀の山櫻。今を盛りなる由承り及び候ふ程に。只今志賀の山路へと急ぎ候。

道行　三人上

春の

色。棚引く雲の朝ぼらけ。棚引く雲の朝ぼらけ。のどけき風の音羽山けさ越え来ればこれぞこの名に負ふ志賀の山越えや。湖遠き眺めかな。湖遠き眺めかな

急ぎ候ほどに江州志賀の山に着きて候。暫く此の處に候ひて花を眺めうずるにて候

シテ ツレ 謡二人 真ノ声上ゲ 拍子ニ合ハズ

さざ波や。志賀の都の名を留めて。昔ながらの山櫻。雲に則れてや心なき身にも情の。知らるらん

シテサシ

山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲。

シテツレ二人

人間萬事様々の世を渡り行く身の有様。物ごとに遮る眼の前。光の影をや送るらん。餘りに

○小謡

上歌 山とをく來て雲又跡を立隔て。入りつる方も白浪の。入りつる方も白浪の。谷の川音雨とのみ聞えて松の風もなし。げにや誤つて半日の客たりしも。今身の上に知られたり。今身の上に知られたり。

不思議やなこれなる山賤を見れば。重かるべき薪に花の枝を折りそへ休む所も花の陰なり。これは心ありて休むか。たゞ薪の重さに休みゆくか

シテ 仰せ畏つて承り候ひぬ。まづ薪に花を折る事。道のべのたよりの櫻折りそへて薪や重き春の山人と。歌人も御不審

ありし人の今更何と答へ申さん

ツレカヽル上　又奥深き山路なれば松も桜も

多けれども取り分き花の陰に

休むを　シテ内　たゞ薪の重さに休むかと

の作は面白きよしなれどもさりながら　ワシテレ二人カヽル上

彼の黒主が歌の如く其の様賤しき

山賤の薪を負ひて花の陰に。

休む姿のげにもまた其の身に

応ぜぬ振舞なり許し給へや上臈

達「ワキ」ワキ内　これは如何に優るをも羨ま

ざれ。劣るをも賤しむなとの故人の

掟は真なりけりやさしくも古歌

の喩の心をもつて今の返答や　カヽル上

したり　シテ内　いやいや古歌の喩と

やらんも。更々知らぬ身なれども。

賤しき身も思ひよりて　ワキカヽル上 彼の、

大伴の黒主が心をよする花の波

シテ　和歌の浦回の藻汐草　ワキ　かくた人

あく世語りの　シテ　それは黒主　ワキ　これは真に

○小謡

シテ　今まも賤しき　ワキ　山賤の　上同 ○身にみへ

應ぜぬ事なれど。許させ給へ旅人。

さてもの思ひ出に昔の陰に休まん。

げにや今とても。筆を遺して貫之が。

詞の玉のおのづから。古今の道と

かや古今の道とかや。クリ上 お拍子二合ズ それかして

かつし時代を尋ぬるに。延喜の聖代

の古。国を恵み民を撫でて萬機の

政を。治め給ふ　シテサシ上 ○然れば其の御時に

○サ面獨吟
○切追雑子

至つて和歌の道盛んにして古今
の詠歌を撰び二聖六歌仙を初めと
してその外の人々は。なべての葛の
はひ廣ごり枝に繁き木の葉の
露の色に染み行く歌人の心は花に
あるとかや　げに埋れ木の人知れぬ。
ことわざまでの。情とかや　そもそも。

難波津淺香山の。影さへ見ゆる山の井
の淺く人か思ひ草の。露往き霜。
来る色あれや。濱の真砂より。数多き
言の葉の心の花の色香までも。
妙なりや數島の道ある御代の翫び。
然れば三十一文字の。神も守護し
給ひて。無見頂相の如来も感應

○小謡

至れ陰へば。君も安全に。萬民時を樂みて。都鄙圓滿の雲の下。四海八洲の外までも。浪の聲萬歳の響は。長閑けかりけり 今すへらぎの御代久に。萬の政の。道直に渡る日の。東南に雲収まり西北に風靜かにて。詞の林榮ゆくや花も常磐の

山松の。巷に謡ふ聲までもこれ和歌の徳に漏るべしや。天地を動し鬼神も。感をなすとかや げにや異ある山賤の。げにや異ある山賤の。家路いづくの末ならん。床しき心あるべし 今は何をか包むべき。其の古は大伴の。黒主といはれし

時代とて此の山の神ども人や見る
らん 上地 そも此の山の神そとの不思議
やさては大伴の シテ それの黒主が家の
名の 地 大伴が シテ われはたゞ 月 久新賀よ
友もなくて獨り。山路の陰
に長休みしつる恥かしや。ゆふべの
雲に立ちかくれて志賀の。宮路に

隠りけり志賀の宮路に隠りけり隠りけり 中入間

ワキ上ゲ三ヘ 待謡 いざ今日ハ。雲の山べに交りなん。
雲の山べに交りなん。暮れなばな
げの花の陰。月に移して天の原。時の
調子に移りくる。舞楽の聲ぞ。
あらたなる舞楽の聲ぞあらたなる

後シテ黒主上 出端 雪ならで幾たび袖を拂はまし。花

の、吹雪の志賀の山、越えても同じ
花園の里も春めく近江の海の、志
賀辛崎の松風までも、千聲の春の、
長閑けさよ海越しに見えてぞ向ふ
鏡山 地 年経ぬる身は老が身の
シテ それの老が身それの志賀の 上地 神の
白木綿かけまくも恭しや神楽の舞

ロンギ上 不思議なりつる山人の、不思議なり
つる山人の、翁の身の永き日も暮る

○仕舞

和光のあらたさよ シテ上 げに惜むべし
君が代の長閑けきさや春の花の、
塵よ交はる雪ならば踏む跡まで
も心せよ 上地 げに心して春の風、聲も
添ふなり御神楽の シテ 小忌の衣の色ハヘ

地 て花の梢の白和幣 シテ中 松の立枝の
地 青和幣。かくるやかへるや梓弓末の。
山邊も錦えまれば道もさりあへず散
る花の雲の羽袖を返しつゝ紅の
袴のそばを取り。拍子を揃へて神か
ぐらげる面白き。奏でかなで面白
き奏でかな。

鵺

概説

内七巻ノ二

諸國一見の僧、攝津の國蘆屋の里に一夜を明しけるに、更け行く沖の波間より異體のものの寄り來れるを見れば、丸木船の如くにて乘りたる人も見えず、何物なるかと尋ぬれば、昔近衛院の御宇に賴政の箭先にかかりて命を失ひし鵺の亡靈なりと荅へて其時の有様を語り、浮み難き身を弔ひ給へとて見えずなりしかば、僧は夜もすがら讀經しゐたる處に、面は猿、手足は虎なる恐ろしげなる鵺の本體現れ、往時を懺悔し、尚賴政は御劍を恩賞に賜り、我は空穗舟に入れられて淀川に流され、斯くも此浦に漂ひ來れる由を語りて、暗中に姿を失ひけり。

此曲多少緩急アレド總シテ淀ミナクサラリト強ク謡フベシ

役別	装束附
ワキ 旅僧	角帽子 着附無地熨斗目 水衣 腰帯 珠数 扇
前シテ 舟人	面三日月 黒地金段鉢巻 黒頭 着附無地熨斗目 水衣 腰帯 扇指 棹持
後シテ 鵺	面猿飛出(又ハ小飛出) 赤地金段鉢巻 赤頭 着附段厚板 半切 法被 縫紋腰帯 修羅扇指 打杖持

季	四月	曲柄	四五番目(畧二番目)
所	攝津國武庫郡蘆屋ノ里	稽古順	二級

鵺

観阿彌清次作

ワキ僧 次第上 ヨワク 拍子二合
世を捨て人の旅の空。世を捨て人の旅の空。来し方いづくなるらん

ワキ詞
これは諸国一見の僧にて候。われ此の程は三熊野に参りて候。又これより都に上らばやと思ひ候

道行上
程もなく。帰り紀の路の関越えて

帰り紀の路の関越えて。なほ行く
末は和泉なる。信太の森をうち
過ぎて。松原見えし遠里の。ここ
住の江や難波潟。蘆屋の里に
着きにけり蘆屋の里に着き
にけり。急ぎ候ふ程に。これははや
津の国蘆屋の里に着きて候。
日の暮れて候程に宿を借らばや
やと思ひ候

シテ舟人サシ上
一声

悲しきかなや身は籠鳥。心を知
れば盲亀の浮木ただ闇中に埋
れ木の。さらば埋れも果てずして
て亡心何に残るらん。浮き沈
む涙の波のうつほ舟。こがれて

堪へぬ。いましへを 思ひやつべき。
隙ずなき 不思議やな夜も更
け方の浦波に、篝火に浮びきたる
物を。見れば聞きしに変らずして。
舟の形はありながら。ただ埋れ木
のごとくなるに。来る人影もさだか
ならず。あら不思議の者やな

シテ 不思議の者と承る。そなたは如何
なる人やらん。固より憂き身は埋れ
木の。人知れぬ身と思し召さば。
不審はなさせ給ひそとよ。いや
これはただ此の里人の。さも不思議
なる舟人の。夜々来るといひつる
に。見れば少しも違はねば。われも

不審もと申すなり

〔シテ〕此の里人とは。蘆の屋の。灘の塩焼く海人の。類を何と疑ひ給ふ

〔ワキ〕塩焼く海人の類ひならば。業をとこそなさで暇ありげに。夜々来るは不審なり

〔シテ〕げに暇のある事をと。疑ひ給ふも謂あり。古き歌にも。蘆の屋の

灘の塩焼き暇なみ。黄楊の小櫛は挿さず来にけり

〔シテ〕われもうきよの暇なみの

〔ワキ〕汐まされて

〔シテ〕海人は

○小謡

〔上歌〕さゝで来まけりうつほ舟さゝで来まけりうつほ舟。現か夢かわけてぞみるめも刈らぬ蘆の屋よ起き夜寝て海人の心の

闇を弔ひ給へ。有難や旅人は。世を
遁れたる御身なり。われは名のみ
ぞ捨て小舟。法の力を。頼むなり
法の力を頼むなり。（ワキ）何と申せ
ども更に人間とはみえず候。いかなる
者ぞ名をも名告り候へ。（シテ）これは近
衛の院の御宇に。頼政が矢先に

かゝり。命を失ひし鵺と申しゝ
ものゝ亡心にて候。有様
委しく語つて。聞かせ申し候べし。
跡を弔うて給はり候へ。（ワキ）さては鵺
の亡心にて候か。其の時の有様委しく
語り候へ。跡をば懇に弔ひ候べし

クリ上地　サラリト引立テヽ手強ク　拍子ニ合ハズ
さても近衛の院の御在位の時。

○サシ曲獨吟

仁平のころほひ。主上よなよな
御惱あり。有驗の高僧貴僧に
仰せて大法秘法を修せられけれども。
其のしるし更になかりけり。御惱
の丑の刻ばかりにてありけるが。
東三條の森の方より黒雲一むら
立ち來つて御殿の上に蔽へば

必ず怯え給ひけり。すなはち
公卿詮議あつて。定めて變化の
ものあるべし。武士に仰せて警固
あるべしとて。源平兩家の兵を
選ぜられける程に。頼政を選び出
だされたり。頼政其の時兵庫
の頭と申しける。頼みたる郎等

に猪の早太。唯一人召し具したり。
我が身は二重の狩衣に。山鳥の尾
にて作いだりける。鋒矢二筋重籐
の弓に取り添へて。南殿の大床に
伺候して。御悩の刻限を今や
今やと待ち居たりけるに。案
の如く。黒雲一むら立ち来り。御

殿の上に蔽ひたり。頼政きつと
見上ぐれば。雲中に怪しきもの
の姿あり。矢取つて打ちつがひ。南無
八幡大菩薩と。心中に祈念して。
よつぴきひやうと放つ矢に。手応へ
してはたと當る。得たりやおうと
矢叫びして落つる所を猪の早太

つゝと寄りて續けさまに九刀ぞ
刺いたりける。さて火を燈しよく
見れば頭は猿。尾は蛇。足手は虎の
如くにて。鳴聲鵺に似たりけり。
恐ろしなんども愚かなる。形なり
けり。ロンギ上 げに隠れなき世語りの。其の
一念を飜し。浮かむ力となり給へ。

シテ上 浮かむべき。たより渚の浅緑。三角
柏にあらばこそ沈むは浮かむ縁な
らめ。地上 げにや他生の縁ぞとて
シテ 時もこそあれ今宵しも。地 あまり世
の人にあひ舟の シテ 棹取り直しうつ
ほ舟 地 寄るとみえしが シテ 夜の波に
浮きぬ沈みぬ見えつ隠れ絶え絶え

のどくへよ聞く鵺の聲。恐ろしや凄
まじやあら恐ろしや凄まじや

ワキ上ヲ 待謡
御法の聲も浦波も。御法の聲も浦
波も。皆寂相の道弘き。法を受け
よと夜と共に。此の御經を讀誦
する此の御經を讀誦する

ワキ
一佛成道觀見法界。草木國土悉

シテ
皆成佛。有情非情。皆倶成
佛道

ワキ
轉むべし

シテ
頼むべしや

上地
五十二類もわれ同性の。涅槃に
引かれて眞如の月の夜汐に浮び
つゝ此處まで來れり。有難や

ワキ
不思議
やな目前に來る者を見れば。面は猿
足手は虎。聞きしにかはらぬ變化の姿。

あら恐ろしの有様やな

シテ上 手強ク
さてもわれ悪心外道の変化となつて。佛法王法の障とならんと。王城近く遍満して。

○切ヨリ獨吟仕舞○ 上
東三條の林頭に暫く飛行し。丑三つばかりの夜な夜なに。御殿の上に飛びさがれば。

上同サゲ 拍子二合
即ち惱頻りにて。玉體をなやまして。おびえ魂消らせ給ふ事も我が爲す業よと怒りをなしに。思ひもよらざりし頼政が。矢先に當れば變身失せて。落々磊々と。地に倒れて。忽ちに滅せし事。思へば頼政が矢先よりは。君の天罰を當りけるよと。今こそ思ひ知られたれ。その時主上御感あつて。獅子王と

云ふ御剱を。賴政に下されけるを
宇治の大臣賜りて。階をおり給ふ
に。折節郭公。音づれければ。大臣取
りあへず。ほとゝぎす。名をも雲居
に。あぐるかなと。仰せられければ。賴政
右の膝をついて。左の袖を廣げ
月を少し目に懸けて。弓張月の。

いるにまかせてと。仕り御剱を
賜はり御前を。罷り帰れば。賴政は
名をあげて。われは名を流すうつ
ほ舟に。押し入れられて。淀の。
よどみつ流れつ行くまの。鵜殿も
同じ蘆の屋の。うらわの浮洲に
流れとまつて。朽ちながらうつほ

舟の月日もみえず暗きより暗き道にぞ入りにける。遥かに照せ山の端の遥かに照せ山の端の月と共に。海にも入りにけり海月と共に入りにけり。

大原御幸　概説

内七巻ノ三

高倉天皇の中宮にして安德天皇の御母なる建禮門院は、平家の一門長門の國早鞆の沖にて悉く沒落せる時、御身を投げさせ給ひしが、源氏の兵に助けられ、再び都に上らせ給ひて御出家遊ばされ、山城國大原の寂光院におはして先帝並に御母二位殿の御跡を弔はせ給ひけるを、後白河法皇あはれに思召し、文治二年の初夏の頃、萬里小路中納言以下を隨へて御幸あらせられたり。法皇四邊の景色を眺め給ひて阿波内侍と御物語あるうち、女院は大納言局を伴ひ、上の山より花を摘みて御歸りあり、先づ庵室の内に請じ給ひて叡慮の程を拜謝し、やがて安德天皇御最後の様を細かに語りて共に御涙に沈ませ給ひしが、時移り、早や還幸ともなりければ、女院は柴の戸に暫し御輿を見送りて庵室に入らせ給ひけり。

此曲九番習ノ内ニシテ心得多キ曲ニ依リ篤ト心シテ謡フベシ
小書　庵室留　寂光院

役	別	装束附
ワキツレ	大臣	洞烏帽子　着附厚板　袷狩衣　白大口　紋付腰帯　扇
ツレ二人	内侍 大納言局	面連面　鬘　花帽子　着附摺箔　無地熨斗目　珠数持 局ハ籠持　後局ハ妻木蕨持
前シテ	建禮門院	面若女　鬘　花帽子　着附摺箔　白綾　珠数持
後シテ	同	前ニ同ジ但紫水衣ヲ着ル右ニ珠数左ニ籠ニ木葉入レ持
ツレ	後白河法皇	花帽子　着附白綾　水衣　辷大口　浅黄指貫　紋付腰帯　掛絡 水晶珠数　扇
ワキツレ	輿舁二人	着附厚板　白大口　腰帯　輿舁ク
ワキ	萬里小路中納言	風折烏帽子　着附厚板　單狩衣(又ハ長絹ニモ)　白大口　腰帯　扇

季	四月	曲柄	三番目(鬘物)
所	山城國愛宕郡大原村 寂光院	稽古順	高等之部 一級

大原御幸

世阿彌元清作

ワキツレ大臣 詞　明カニ違シテ

これは後白河の院に仕へ奉る臣下なり。さても此の度先帝二位殿を初め奉り。平家の一門長門の國早鞆の沖にして悉く果て給ひて候。女院も御身を投げさせ給ひ候を取り上げなり。かひなき

御命助かりれハしまし候。三河の
守範頼。九郎大夫の判官義経
兄弟供奉なし申し。三種の神宝
事故なく都に納まり給ひ候。さる
程に女院の都に移らせ給ふべ
かりしと。先帝安徳天皇の御
菩提。並に二位殿の御跡御弔の

ために。大原の寂光院に浮世を
厭ひ候所と。法皇御幸となされ。
御訪ひあるべきとの勅諚にて候間。
御幸の山路をも申しつけばやと
存じ候。如何に誰かある。大原へ
御幸あるべきなれば。行幸の道
をもつくり其の清めをも仕り候へ

シテ女院サシ上 山里は物の寂しき事こそあれ。世の憂きよりはなかなかに。住みよかりける柴の樞。都の方の音信は。間遠に結へるませがきや。うきふしげき竹柱。立ち居につけて。物思へど。人目なきこそ安かりけれ。

○又地ニテモ

下歌 折々に心なけれど訪ふものは。

○小謡

上歌 賤が爪木の斧の音。賤が爪木の斧の音。梢の嵐猿の声。これらの音ならでは。真拆の葛青葛来る人罕になり果てて。草顔淵が巷に。滋き思ひの行方とて。雨原憲が樞とも湿ふ袖の。涙かな湿ふ袖の涙かな。

シテ内 如何に大納言の局。後の

山より樒を摘み作べし　局　わらはも御供申し爪木蕨をとり供御にまゐらせ申し候べし　シテサシ　譬言は便なき事なれども悉達太子の浄飯王の都を出で檀特山の嶮しき道を凌ぎ。菜摘み水汲み薪とりどり様々に難行し仙人に仕へさせ給ひて。終に成道あるとかや。われも佛の為なれば。御花筐とりどり尚山深く入り給ふ尚山深く入り給ふ

一セイ　中納言上　立聲ツヨク　拍子三合ハズ

九重の花の名残を尋ねてや。青葉を慕ふ山路かな　次第　分けゆく露もふかみ草。分けゆく露もふかみ草。大原の御幸急がん

行幸を早め申しける。大原に入御なる。
かくて大原に御幸あつて。寂光
院の有様を見わたせば。露結ぶ庭の
夏草繁りあひて。青柳糸を
乱しつゝ。池の浮草波に揺られて。
錦をさらすかと疑はる。岸の山吹
咲き乱れ。八重立つ雲の絶間より。

山郭公の一声も。君の御幸を待
ち顔なり。法皇池の汀を叡覧
あつて。池水に汀の桜散り敷
きて。波の花こそ盛りなりけれ。
ふりにける。岩の隙より落ちくる。
岩の隙より落ちくる水の音さへ
由ありて。緑蘿の垣翠黛の山。

絵にかくとも筆にも及びがたし。一宇の御堂あり。甍破れては霧不断の香を焼き。樞落ちては月もまた常住の燈火をかゝぐと自かゝる所も物さびや。かゝる所かおすでや。

ワキ これあるこそ女院の御庵室にてありげに候。軒には蔦朝顔這ひかゝり。藜藋深く閉せり。あら物さびの気色や。お。めすよ此の庵室のうちへ案内申し候。

内侍 誰にてわたり候ぞ。

ワキ これは万里の小路の中納言にては候。

内侍 それはさて人目まれなる山中へは何とて御わたり候ぞ。

ワキ さん候女院の御住居御訪ひのため。

法皇これ迄御幸にて候 内侍「女院の御上の
山へ花摘に御出でにて。今の御留守
にて候 ワキ「御幸の由申して候へば。
女院の上の山へ花摘に御出でにて。
今の御留守の由候。暫く此の處に。
御座をなされ。御帰りを御待ちあらう
ずるにて候 法皇「やあ如何にあの尼前。

汝はいかなる者ぞ 内侍「げにげに御見忘
れの御理。これの信西が女。阿波の
内侍がなれる果にて候。かくあさ
ましき姿ながら。あすをも知らぬ
此の身なれば。恨みとの更に思はず
さぶらふ 法皇「女院はいづくに御わたり
候ぞ 内侍「上の山へ花摘に御出でにて候

法皇「さて御供には　内侍「大納言の局。今
少し待たせたわまし候へ。やがて
御帰りにて候べし

後シテ女院サシ「昨日も過ぎ今日も空しく暮れな
んとす。あすとも知らぬ此の身な
がら。たゞ先帝の御面影。忘るゝ際は
よもあらじ。極重悪人無他方便唯
稱彌陀得生極樂。主上と初めなり。
〔中音〕二位殿一門の人々成等正覚。南無
阿彌陀佛や。庵室のあたりに人音
の聞え候　後局「暫くこれに御休み候へ
内侍「只今こそあの岨づたひを女院
の御帰りにて候　法皇「さて何れが女院。
大納言の局はいづれぞ　内侍「花筐

臂にかけさせ給ふは。女院にて
わたらせ給ふ。爪木に蕨折り添へ
たるは。大納言の局なり。いかに
法皇の御幸にては
妄執の閻浮の世をも忘れもやらで
うき名をまたもらせばもろ涙
の色も緋の衣もつましや

とは思へども法の人同じ道にと
頼むあり一念の窓の前。一念の
窓の前に。摂取の光明を期しつゝ
十念の柴の樞には。聖衆の来迎
を待ちつるに。思はざりける君の幸。
古に帰るかとあまの思ひ出の嬉しさ。
げにや君こそ数ならぬ恵みをかけて。

○獨吟

中 あれもさうな大原や。芹生の里の細道。朧の清水月ならで。御影や今に残るらん。さてや御幸のをりしもの。妙なる時節なるらん

シテ上 春過ぎ夏もきたや北祭の。折なれべき青葉に交る夏木立。春のなごり惜まるゝ

上地 遠山にかゝる白雲は

シテ 散りにし

花の形見かや。

上地 夏草のしげみが原のそことなく。分け入る道の末までも。

シテ 今とてや。今とてや。げに寂光の。寂かなる。光の影を惜めたゞ。

上地 光の影も惜しけき。玉松が枝に

シテ 咲きかゝるや 池の藤波夏かけて

地 これも御幸を

シテ 待ち顔に

地 青葉

隠れの遅桜初花よりもめづらかには
なかなか様変る有様を。衰と。寂寞に
かけまくも。忝しや此の御幸さへ
の樞のまさしが猶もあるべき住居
なるべしや。あるべき住居なるべし。
シテ 思はずも深山の。奥の。住居して。
雲居の月をよそに見んとはかやう

に思ひ出でしに此の山里までの御幸。
返す返すも有難うてこそ候へ 法皇詞 先つ頃
或人の申せしは。女院は六道の有様
正に御覧じけるとかや。仏菩薩の
位ならでは見ぬ事なきに不審
なるゆへ シテ 勅諚のさる御事なれ
どもつらつら我が身を案じみるに

クリ　それ身を観ずれば岸の額に根を。離れたる草。命を論ずれば。江のほとりにつながざる舟。されば天上の楽しみも。なほ白露の玉葛。あがらへ果てぬ年月も。終に五衰の
おとろへの消えもやられぬ命のうちに六道の巷に迷ひしあり

○稱今

クセ　拍子合
まづ一門西海の波に浮き沈み。よるべも知られぬ船のうち。海に臨めども。潮なれば飲水せず。餓鬼道のごとくなりし。或時は汀の波の荒磯に。打ち返すかの心ちして船擧りつ泣き叫ぶ聲の。叫喚の罪人もかくや浅ましや。陸の争ひある時は。これぞ

真は目の前の修羅道の、戦ひあら
恐ろしや数々の。駒の蹄の音きけば
畜生道の有様を。見聞くも同じ
人道の。苦しみとなり果つる憂き
身の果てぞ悲しき。

法皇「真は有難
き事どもかな。先帝の御最期の
有様何とかはわたりたまひつる御物語り
候へ

シテ「恥づかしながら語つて聞かせ申し
候べし。語 其の時の有様申すにつけて
恨めしや。長門の国早鞆とやらん
まで筑紫へひとまづ落ち行く
べきと一門申しあひしに。緒方の三
郎が心変りせし程に。薩摩潟へや
落さんと申し折節より汐に

支へられ給ふがうよと見えしに。能
登の守教經の。安藝の太郎兄弟を
左右の脇に挟み。最期の供せよとて
海中に飛んで入る。新中納言知盛は。
沖なる船の碇を引き上げ兜と
やらんに戴き。めのと子の家長が
弓と弓とを取りかはし。其のまゝ

海に入りにけり。その時二位殿は
色の二つぎぬに。練袴のそば高く
はさんで。我が身は女人なりとても。
敵の手には渡るまじ。主上の御供
なさんと。安徳天皇の御手をとり
船端に臨むに。いづくへ行くぞと勅諚
ありしに。此の國と申すて逆浪多く。

かく浅ましき所あり。極楽世界と
ましてめでたき所の此の波の下に
さぶらふなれば。御幸なしならんと。
泣く泣く奏し給へば。さて心得たり
とて。東に向はせ給ひて。天照太神に
御暇申させ給ひて〽又。十念の御為
に西に向はせたまひまし〽今ぞ知る。

御裳濯川の流には。波の底にも
都ありとは。これを最期の御製
にて。千尋の底に入り給ふみづからも。
續いて沈みしを。源氏の武士より上
げてかひなき命ながらへ。二度。龍顔
にあひなり。不覚の涙に袖を
志ほる。恥かしき。いつまでも御名残

はいつで盡きぬべきや、還幸とすゝむれば、や還幸とすゝむれば、輿を早め還つぞし。寂光院を出で給へば

シテ上 女院は柴の戸に。しばしが程は見送らせ給ひて、御庵室に入り給ふ、御庵室に入り給ふ

梅枝

概説

内七巻ノ四

甲斐の國身延山の僧、攝津國住吉にて村雨に逢ひ、とある庵に宿りを求めけるに、庵の内に樂の太鼓と舞の衣裳との飾りあるを訝しみ、其仔細を問へば、主の女、是は人の形見なり、之に就きあはれなる物語ありとて、昔此住吉の樂人富士といへるもの、天王寺の樂人浅間といへるものの爲に討たれたるを、其妻悲みてうつつなき有様となり、常に太鼓を打ちて慰みしが、其人も今は空しくなれりと語り、其跡を弔ひて給はれと請ひて姿は見えずなりしが、僧の讀經に引かれて富士の妻の靈現れ出で、夫が形見の衣裳を著して懺悔の舞を舞ひ、歌を歌ひ、夫を戀ふる様なりしが、いつしか消え失せけり。

此曲戀慕哀傷ヲ旨トシシツトリト花ヤカナラヌ様謡フベシ

役別	役	装束附
ワキ	旅僧	角帽子　着附熨斗目　水衣　縫紋腰帯　扇　珠数　經巻懐中　大口僧ニモ
ワキツレ	從僧二人	角帽子　着附熨斗目　水衣　縫紋腰帯　扇　珠数
前シテ	里女	面深井　着附摺箔　鬘　鬘帯　無色唐織
後シテ	樂人冨士ノ妻	面深井　鬘　鬘帯　着附摺箔　鳥甲　縫箔腰巻　舞衣　扇

季	九月	曲柄	四番目(畧三番目)
所	摂津國東成郡住吉	稽古順	二級

梅枝

世阿彌元清作

ワキ僧 ワキツレ二人 次第上 ヨワク 拍子ニ合

捨てゝも廻る世の中は。捨てゝも廻る世の中は。心の隔なりけり。

ワキ詞

これは甲斐の國身延山より出でたる。沙門にて候。われ一縁の衆生を濟度せんと。多年の望みにて候程に。此の度思ひ立ち廻國に赴き候。

道行 二人 上

いづく

みも住みはつべき雲水の。住みは
つべき雲水の。身はさて知らぬ
旅の空。月日程なく移りきて。
所を問へば世を厭ふ。身が衣手や
住の江の里にも早く着きにけり
里にも早く着きにけり　急ぎ候
程に是ははや津の国住吉に

着きて候。あら笑止や俄かに村雨の
降り候。これなる庵に宿を借らばやと
思ひ候。如何に此の屋の内へ案内申し候

シテ女上　げにや松風蕭瑟の宿に通ひて
いへども。眞砕の葛来る人もなく。
心もすめる折節に。誰と問ふ人
は誰やらん　是は無縁の沙門

よその一夜の宿を御借し候へ

シテ　げにげに出家の御事一宿は利益なるべけれども。さながら傾く軒の草。埴生の小屋のいぶせくて。何と御身を置かるべき　よしよしうちはいぶせくとも降り来る雨に立ち寄る方。なくはたださりとては貸し給へ

○小謡

シテ　げにや雨降り日もくれ竹の一夜を明かさせ給へとて　いざや此方へと伴ふ露の葎の宿はれたくとも袖をかたしきて泊りあれや旅人　西北に雲起りて西北に雲起りて東南に来る雨の脚早くも吹き晴れて月にならん嬉しや雨の

住吉の松吹く風も心して旅人の夢をさますな旅人の夢をさますなよ。ワキ詞 如何に主に申すべき事の候 シテ 何事にて候ぞ ワキ これにかざりたる太鼓同じく舞の衣裳の候不審にてこそ候へ シテ げによく御不審候ものかな。これは人の形見にて候。それにつき哀なる物語の候語つて聞せ申し候べし ワキ さらば御物語り候へ シテ語 昔当国天王寺に浅間といひし伶人あり。同じく此の住吉にも富士と申す伶人ありしかるに其の頃内裏に管絃の役を争ひ互に都に上りしに。富士此の

役を賜はるによつて浅間安からずに
思ひ富士をあやまつて討たせぬ。
其の後富士が妻夫の別れを悲しみ。
常は太鼓をうつて慰み候ひしが。
それも終に空しくなりて候。逆縁
ながら弔ひて給はり候へ　ワキ　かやうに
に委しく語り候其の古の富士が

妻のゆかりの人にてましますか
シテ　いやとよそれは遥の古。思ふも遠き世
語のゆかりとはいふ事あるべからず
ワキカヽル上　拍子ニ合ハズ　さらべ行とて此の物語深き思ひの
色に出でて。涙を流し給ふぞや、
シテ内カヽル　あら何れも女は思ひ深し。殊に恋慕の
涙に沈むをなどかは哀れと御覧ぜざらん

ワキカヽル上「なほも不審は残るなり。形見の太鼓
形見の衣。とは残し給ふらん
シテ「主は昔になりけれども。太鼓は
朽ちず苔むして　ワキ「鳥驚かぬ
シテ「此の御代は　上歌「住むもかはらぬ池水
の。すむもかはらぬ池水の。忘れて
年を経しものを。また立ち帰る
執心を。助け給へといひ捨てゝ。かき
消すやうに失せにけり　中入間
ワキ上「それ仏法様々なりとや申せども。
法華はこれ最第一　ワキツレ「三世の諸仏の
出世の本懐。衆生成仏の直道なり
ワキ中「なかんづく女人成仏疑ひあるべからず
ワキ二人「一者不得作梵天王。二者帝釈三者

魔王四者轉輪聖王。五者佛身云何
女身即得成佛何疑ひかありそ海の
深き執心をも。晴らして浮び給へや
○小謡
或ハ若有聞法者。或ハ若有聞法者
無一不成佛と説き。一度此の經を
聞く人成佛せずといふ事なし。
たゞ頼め頼もしや。弔ふ燈の影よりも。
化したる人の来りたり。夢か現か
見たりとも分きかぬ姿かな。不思議や
な見れば女性の姿なるが。舞の衣裳
をも着し。さながら夫の姿なり。
さてはありつる冨士が妻の。其の思ひ
霊までまし〳〵ますか。げにや碧玉の
冠さし蘆。錐嚢に脱するとハ今の身の

○切返囃子

上に知られ侍らずや、さりながら
好める法の受持に遑なく、変成男子
の姿となどやは語らし給ひぬぞ。
然らば御弔ひの力にて、憂かりし
身の昔を懺悔に語り申さん

○独吟
○仕舞

クセ

さるにてもわれながらよしなき
恋路に侵されて、長く悪趣に堕し

ける、さればにや、女心の乱れ髪ゆひ
かひなくも恋衣の、つまの形見を
戴き此の狩衣を着しつつ、常には
打ちし此の太鼓の、寝もせず、起きも
せず涙しきたへの枕上に、ある執心
を晴らしつつ、佛所に至るべし、嬉しの
今の教へや、思ひ出でたる一念の。

發るは。病とありつゝ継ざるは
これ薬なりと。古人の教へなれば。
思へど思はじ恋忘れ草も住吉の。
岸に生ひてふ花なれば。手折りや
せまし我が心。契りあさぎぬのかた
思ひ執心を助け給へや。ロンギげに
面白や同じくは。懺悔の舞を奏

○獨吟
○仕舞

シテでゝ愛着の心を捨て給へ。いざいざ
さらば妄執の。雲霧を拂ふ夜の。
月も半ばなり夜半楽を奏でん
地心も共に住吉の。松の隙より眺
むれば。シテ波もて結へる淡路潟
地沖も静かに青海の。シテ青海波の
地波返しかへすや袖の折を得て。

軒端の梅に鶯の　来鳴くや花の
越天楽　謡へや謡へ　梅が枝
梅が枝にこそ。鶯は巣をくへ風吹かば
いかにせん花に宿る鶯　楽
面白や鶯の。面白や鶯の声に誘引
せられて花の陰に来りたり
われも御法に引き誘はれて。われも
御法に引き誘はれて。今目前に。
立ち舞ふ舞の袖なれて夫をと
慕ふる。想夫恋の楽の鼓。うつゝなの
我が有様やな。思へば古を。思へ
ば古を。語るもなほも執心ぞと。
やせば月も入り音楽の音は。
松風に類へて。ありし姿は仍け

暮れは面影だにかかりや殘るらん面影だにかかりや殘るらん。

誓願寺　概説

内七巻ノ五

一遍上人、紀伊國熊野權現より感得せる六十萬人頌の勸進札を普く國土に弘めんとて都に上り、誓願寺に到りて之を諸人に授けけるに、一人の女出で來りて御札を給はり、其札に六十萬人決定往生とあるを見て、六十萬人より外は往生に漏るるにやと問ひければ、上人、六十萬人とは六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華此四句の頭字一づつを取りていへるなれど、素より漏るる方無き御法ゆゑ、人數をいかで定むべきと答へければ、女いたく喜び、さらば此寺に掲げられたる誓願寺といへる額を除き、上人の筆にて六字の名號に書きかへて給はれと請ひ、其身の和泉式部の靈なることをほのめかして姿を隱しぬ。上人女の請のままにすれば、式部の靈現れ、上人に依りて佛果を得たるを喜び、舞を舞ひ、菩薩聖衆と共に六字の額を禮しけり。

此曲總ジテ殊勝ナル所ヲ闊カニ謡フベシ
小書　三躙　乏位走り

役別		裝束附
ワキ	一遍上人	角帽子　着附無地熨斗目　水衣　白大口　縫紋腰帶　扇　珠數　札懷中
ワキツレ	從僧二人	角帽子　着附無地熨斗目　水衣　白大口　縫紋腰帶　扇　珠數
前シテ	里女	面若女　鬘　鬘帶　着附摺箔　色入唐織着流　水晶珠數持
後シテ	和泉式部	面若女　天冠　黒垂　着附摺箔　緋大口　紫長絹(又舞絹ニモ)　鬘扇

季	三月	曲柄	三番目(鬘物)
所	京都京極六角誓願寺	稽古順	一級

誓願寺

世阿彌元清作

ワキ僧
ワキツレ二人
次第　上ヨワク　拍子ニ合

敎への道も一聲の。敎への道も一聲の。御法を四方に弘めん。

これは念佛の行者一遍と申す聖にて候。われ此の度三熊野に参り。一七日参籠申し。證誠殿に通夜申して候へば。あらたに靈夢を蒙りて候。六十萬人

決定往生の御札を。遍く国土に弘めよとの霊夢に任せ。まづ都へと志して候。

道行三大上

「弥陀頼む。人ひも三つの御山を。人ひも三つの御山を。今日立ち出づる旅衣。紀の関守が手束弓。入る日数重ねて。時もこそあれ秋の頃。都に着きにけり都に着きにけり。

これははや都誓願寺に着きて候。告に任せて札を弘めばやと思ひ候。

有難やげに仏法の力とて。貴賤群集の多きに。袖を連ね踵をついで。知るも知らぬもおしなべて。念仏三昧の道場に。出で入る人の有難さよ

シテ女サシ上
會釋
「所は名に負ふ洛陽の、花の衣の今更に、心は空に墨染の、ワキ「夕べの鐘の聲々に、称名の御法。シテ「鳧鐘の響。ワキ「聴衆の人音。シテ「軒の松風。ワキ「あれ〳〵あれと、シテ「かれども、弥陀頼む。心は誰も一聲の、心は誰も一聲の、うちに生るゝ蓮臺の、濁りにしまぬ心もて

○小謡

何疑ひのあるべき。有難や此の教へ、漏さぬ誓ひ目のあたり。受け悦ぶや上人の御札をいざやたもたん、御札をいざやたもたん。シテ「いかに上人に申すべき事の候。ワキ「何事にて候ぞ。シテ「此の御札をよく見れば、六十萬人決定往生とありさて六十万人より外ハ

往生に漏れ候べきやらん。返す返すも不審にこそ候へ。答げにもよく御不審候ものかなこれハ三熊野の御夢想に四句の文あり。其の四句の文の上の字をとりて。證文のために書きつけたり。たゞ決定往生南無阿弥陀仏と。此の文ばかり御執み候へ

シテ「さてさて四句の文とやらんハ如何なる事にてあるやらん。愚痴の我等に示し給へ。ワキいでいで語つて聞かせ申さん。六字名號一遍法。十界依正一遍體。萬行離念一遍證。人中上々妙好華。此の四句の文の上の字取れバ六十萬人とハ書きたるなり

シテ 今こそ不審春の夜の。闇とも
照らす弥陀の教へ ワキ 光明遍照十方
世界に。漏るゝ方なき御法なるを。
僅かに六十万人と。人数をいかで
定むべき シテ さては嬉しや心得たり。
此の御札の六十萬人。其の人数をば、
ワキ うち捨てゝ。決定往生南無阿弥

陀佛と、 シテ たゞ一筋に念ずならば、
ワキ 引れてこそ即ち決定する。 ワキシテ 往生なれや
何事も。皆打ち捨てゝ南無阿弥
陀佛と 地 唱ふれば佛もわれもなかり
けり。佛もわれもなかりけり。南無
阿弥陀佛の聲ばかり。至誠心深心
廻向。發願の鐘の聲耳に染みて、

○小謡

〇獨吟

有難や。かゝる妙なる此の教へ。十聲一聲
なかで悟りとも迷ひとも迎へ給ふ
ぞ有難き。さる程に夕陽雲に
うつろひて。西にかげろふ夕月の夜
の念佛をと急がん夜念佛をいざや
急がん。〇ロンギ上 たゞ夜更け行くや夜念佛
の。聴衆の眠覚さんと。鐘打ち鳴

し念佛す シテ上 有難や五障の雲の
かゝる身をも。助け給ふぞ此の世より。
二世安楽の國にもや生れ行かんぞ
嬉しき 上地 げに安楽の國なれや。
安く生るゝ蓮臺の縁ぞ妙なる
シテ中 有難や。有難や。さぞな始めて弥陀
の國涼しき道ぞ頼もしき 上地 頼みぞ

まことに此の教へ或は利益無量罪

シテ「又は餘経の後の世も　地「弥陀一教と

シテ「聞く物を　有難や有難や。萬諸

至教皆是阿弥陀仏なるべし。此の御

本尊も上人もたゞ同じ法の誓願寺

なり。仏と上人を一体に拝み申す

なり。シテ「妙なる上人に申すべき事の候

ワキ「何事にて候ぞ　シテ「誓願寺と打ちたる

額を除け。上人の御手跡にて六字

の名号になして給はり候へ　ワキ「これは

不思議なる事を承り候ものかな。

昔より誓願寺と打ちたる額を除け。

六字の名号になすべき事。思ひも

よらぬ事にて候　シテ「いやこれも御本

文の御告と思し召せ　ワキ　サナリ　夢も御本
尊の御告との御身はいづくに住む
人ぞ　シテ　ウケテ　わらはが住家はあの石塔にて候
ワキ　カヽル　ふしぎやあの石塔は和泉式部の
御墓とこそ聞きつるに御住家とは
不審なり　シテ　ウケテ　うたてやな不審し給ひ
そよわれも昔の此寺に値遇の
あればそむ水のまゝも秋や通ふ
らし　掬ぶ泉のみづからが名を流
きしも恥かしやそれとても
こゝは上人よ。わが偽は無き跡に和泉式
部のわれぞとて。石塔の石の火の。
光とともに。失せにけり光とともに
失せにけり　中入間

ワキ 佛説に任せ誓願寺と打ちたる額を除けて六字の名號を書きつけて佛前に移し奉れば

上歌 ふしぎや異香薫じつゝ、ふしぎや異香薫じつゝ花降り下り音楽の聲する事のあらたさよ。これにつけても称名の心一つを頼みつゝ。鐘打ち鳴らし同音に

ワキ 南無阿弥陀佛阿弥陀如来

後シテ 和泉式部 上 出端

あら有難の額の名號や、末世の衆生済度のため、佛の御名を顕して。佛前に移す有難さよ。われも假なる夢の世に和泉式部といはれし身の。佛果を得るや極楽の歌舞の菩薩となりたるなり二十五の

○サシ曲獨吟
○切迄囃子

地上「菩薩聖衆の法の場は。紫雲たなびく夕日影。常の燈影清く「さながらこゝぞ極楽世界よ。思はれけるかと有難さよ「そもそも當麻寺と申しなるは。天智天皇の御宇。御本尊は慈悲萬行の大菩薩。春日の明神の御作とかや「神といひ佛といひ。たゞこれ水波の隔あり。然るに和光の影廣く。一體分身現れて衆生済度の法の本尊たり「されば毎日一度の。西方浄土に通ひ給ひて。来迎引接の誓ひを現してまします

○仕舞 拍子二合
クセ中
○「聖衆。遥かより。紫雲の上にあれや。聖衆来迎も。落日の前とかや。昔在霊山の

御名の法華一佛。今西方の阿陀如来。慈眼視衆生現れて。娑婆示現観世音三世利益同一體有難や神等がための悲願あり

シテ上　若我成佛の光を受くる世の人の。わか力よのゆき難き。御法の御舟の水馴れ棹さゝでも渡る彼の岸よ。至り至りて楽みを極むる國の道あれや。十悪八邪の迷ひの雲も空晴れ。真如の月の西方も。こゝを去る事遠からず。唯心の浄土ぞ此の誓願寺をおがむなり。

シテ中　歌舞の菩薩もさまざまの

地上　佛事をなせる心かな

序之舞

シテワカ上　○獨吟　○ひとりなほ。佛の御名を尋ねみん。

地上　おのおの帰る法の場へ。法の場へ。法の場へ

又ハ和　法の場への

○仕舞

のげにも妙なる稱名の聲々虚空に
響く音樂の聲異香薫じて
花降る雪の袖をかへすや返す返すも
貴き上人の利益かなと。菩薩聖衆
の面々に御堂にうつる。六字の額を。
皆一同に。禮し給ふは。あらたなり
ける。奇瑞かな。

特116
702

著作權所有
不許複製

大正拾年九月貳拾日印刷
同　年九月廿五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世元滋

京都市上京區二條通麩屋町東北角
發行兼印刷者　檜常之助

東京市神田區錦町一丁目拾番地
發行所　檜大瓜

東京市四谷區傳馬町貳丁目
印刷所　江川堂

終